

佳作

響の回音

長野県 才教学園中学校三年 若林 風歌

私は今、高校受験を控えた中学三年の暑い夏を過ごしている。

私達の学年は、新型コロナウイルスの世界的蔓延という緊急事態を迎えた春に新中学一年生になった。私達だけではなく、その年同じように新しい環境に突如置かれた全ての人々が今もなお、新しい生活様式に慣れるよう努力し、明るい未来が来ると信じ、歯を食いしばって生きている。この苦境は人類にとって、一体感という利点も生み出しているようにも感じる。

ブーンと音を立てて回り続ける扇風機の風に、数学のノートのページがひっきりなしにめくれ上がる。それを押さえながら受験勉強に取り組んでいると、その扇風機の羽音に合わせて、自然と、私の頭の中にはある歌が浮かんできて、いつの間にかリピートえた。

らしの中にしみこんだ貧困生活はどのようなものだったのかを想像し、皆で力を合わせ、衣装作りや舞台作りに励んだ。それから練習を重ねるうちに平和への熱い想いが加速度的に増していき、本番を迎えた。

本番のフィナーレで民衆の歌を歌う際に頭をよぎったのは、コロナ禍や震災、世界各地で起きている戦争や紛争を必死で乗り越えようとしている全ての人々の沢山の顔だった。人間は長い歴史の中で、幾度も幾度も様々な逆境や苦境に立ち向かい乗り越えてきた。これまでの人類の先輩達がそうだったように、私は、何事も絶対に最後まで諦めない。心が動く時。それは「今この瞬間」。常にそのものだ。私達は生きている。生きていくのだ。

岩の向こうに憧れの世界。
我ら夢見た明日が来るよ！

し始める。それは、世界的にも有名なフランス革命を題材にしたミュージカル『レ・ミゼラブル』の劇中歌『民衆の歌』だ。

「闘う者の歌が聞こえるか？鼓動があのだラムと響きあえば新たに熱い命が始まる…。闘え！それが自由への道！」

今年の夏、劇場で始めて『レ・ミゼラブル』のミュージカルを鑑賞した。同秋の文化祭での私の学年の演目が『レ・ミゼラブル』に決定していたため、どうしても本物のミュージカルを見て参考にしたいという思いで母に頼んでチケットをとってもらったのだ。最初はあくまでも文化祭のためという目的だったのだが、いざ観劇を始めるとその世界にのめり込んでいた。

苦境を仲間と共に自らの手で乗り越えようとする主人公達の姿や、決して未来を諦めない力、そして、迫力ある歌声にすっかり魅了された。私の家は母子家庭だ。そのため、とりわけ、劇中で描かれていた母と子が互いに想いあう姿に感動し、涙が止まらなかった。

…そして、文化祭に向けて稽古が始まった。物語の背景となっている当時のフランスの民の暮